

博物館だより

第59号

2003.9.20

Nagano City Museum

茶臼山自然史館企画展「チョウとガの世界―色ともようのひみつ―」

開催中 7月18日(金)～11月3日(月)



茶臼山自然史館では、企画展「チョウとガの世界―色ともようのひみつ―」を開催しています。ガとチョウは生物学的には区別できない同じ仲間です。しかし、チョウが古くから人々に愛されてきたのに対して、ガは「汚い」「害虫」「毒虫」というイメージが強く、嫌われてきました。しかし、よく見ればガにも美しいものがあり、模様や生態なども魅力に富んでいます。

この企画展では、倉田稔氏と佐藤晴子氏から寄贈していただいたガとチョウの標本550点を中心

に、幼虫と成虫の生態写真、幼虫の食草・食樹などを展示しています。ほかにも、自然史館の周りで撮影された生態写真のスライドショー、朽木や落ち葉の陰に隠れたガを探し出すクイズコーナー、チョウの生態を撮影したビデオの上映、アゲハチョウの幼虫やサナギを観察できる野外コーナーなどがあり、見どころ盛りだくさんです。

チョウとガの魅力的な世界をのぞいていただき、身近な自然に目を向けるきっかけにしていきたいと思います。
(畠山幸司)

今年 の わんぱく 教室

博物館では毎年、夏休み期間中に子どもたちを対象とした講座を行っています。今年の夏も、さ

まざまなわんぱく教室を開きました。以下、その内容を簡単に紹介します。

竹トンボを作る

この教室は、日本で古くから利用されてきた竹を使っておもちゃを作ろうというものです。今回は竹とんぼと竹笛を作りました。8月1日に実施して参加者は16組43人でした。

最初に素材である竹の特徴について、博物館実習生が説明しました。よく曲がるけれども折れない。芯が空洞で軽い。延び縮みしないなどなど。こうした特徴を上手に利用して、昔の人は竹馬、竹とんぼ、水鉄砲、うぐいす笛などさまざまなおもちゃを作ってきました。

はじめは恐る恐る握っていたナイフも、だんだん上手に使えるようになり、薄く竹を削れるようになりました。みんな空高く飛ぶ竹とんぼを作ることができました。

竹笛は意外と悪戦苦闘。でも、なかなか鳴らな

い笛が鳴った時の喜びはひとしお。「鳴った鳴った！」の大きな歓声が響いていました。みんな自分達で作ったおもちゃにはさすがに愛着があるようで、大切に持ち帰って行きました。(降幡浩樹)



▲竹トンボ作りに挑戦中

化石採集会

長野市の周辺はかつて海底だった地域です。当時の海底の地層が広がる西山一帯は、各地から貝などの化石が豊富に産出され、化石の宝庫として全国的に知られています。

茶臼山自然史館では、化石採集の楽しさを体験していただき、化石や自然への関心を深めてもらおうと、子どもたちを対象にした化石の採集会を毎年夏休みに実施しています。



今年の採集会は26人の定員に対して3倍以上の希望者があったため、なるべく多くの方が参加できるように、回数を1回増やして開催しました。

8月8日の第1日目は、午前の部と午後の部の2回に分けて実施し、長野市信更町や中条村方面へバスで移動し、野外での化石採集を体験しました。ほとんどの子どもたちが化石採集は初めてでしたが、せんべいのような形のカシパンウニやマガキなどの貝の化石をたくさん採集することができました。

第2日目も8月12日と13日の2回に分けて実施しました。まず、前回採集した化石を小型のハンマーとタガネでクリーニングしました。その後、配布した資料を参考に自分たちで化石の名前を調べ、化石を整理したり展示したりするためのラベルを作成しました。自分たちで採集して調べた化石は、子どもたちにとって夏休みの良い記念になったことと思います。(畠山幸司)

カブトムシ観察会

昆虫類の多くは、卵→幼虫→さなぎ→成虫と体の形を変えながら一生をおくっています。テレビなどを見て知っていても、日常生活の中で体験的にそれぞれの姿を連続してとらえるチャンスを持つことは難しいのではないのでしょうか。

この学習会では、5月にカブトムシ幼虫の生育場所と生育環境を観察し、ペットボトルによる飼



▲ カブトムシの卵の観察

育方法を学習しました。6月はペットボトル飼育ビンの幼虫がさなぎに変化し、成虫に移行しようとしている様子を観察し、7月には生育場所でカブトムシの成虫が発生して交尾する様子を夜間に観察し、卵を産ませるためにオス1匹とメス2匹を家へ持ち帰り、家で飼育しました。

夏休み中の8月には、飼育ケースの中で生まれた卵を観察しました。産卵場所がケースの底に限定されることを発見し、白い米粒ほどの大きさの卵を自分の目でとらえたときの驚きと喜びは、眠っていた意欲と今まで培ってきた観察眼を開花させたことと思います。

白から黄褐色に変化する色、黄褐色に近づくほど大きさを増す卵。それぞれが最大になったときにふ化することなどを発見していきました。

カブトムシの生活史を実体験によって学んだことが自然を身近に感じるきっかけになったことと思います。
(原 定雄)

ワクワク動物博物館

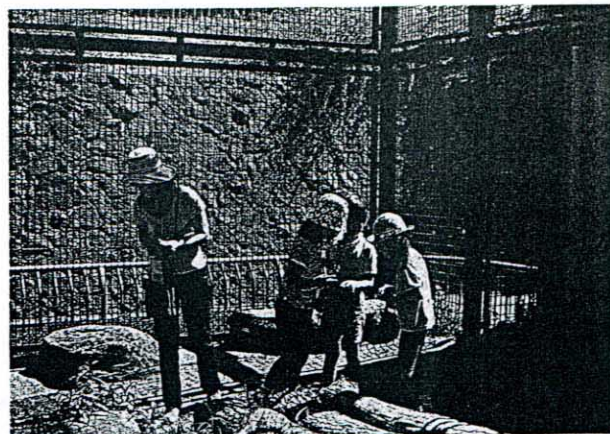
私たちは「動物」という言葉を何気なく使っていますが、一般に動物というとき「ほ乳類」のことを指す場合が多いようです。今回のワクワク動物博物館は、ほ乳類とはどのような動物であるかを進化史と体の造りの両面から探り、標本や生きた動物をじっくりと観察したり触れたりすることで楽しく学んでもらいたいと企画したものです。

午前中は自然史館内の見学と動物標本による説明を行いました。館内見学では子供たちはオオツノシカ・ナウマンゾウのレプリカに興味を抱いていました。館内見学後、1階教室で茶臼山動物園提供の数種類の頭骨標本や毛皮に触れてもらいながら、アゴや体の仕組みが食べるものにより異なることを学びました。

午後は茶臼山動物園のご協力により職員の方に園内を案内していただき、飼育動物への餌やりを体験しながら午前中に説明したアゴの動き等を観察しました。キリンが手から餌の葉を取る力が強いことと、口の周りの感触が気持ちいいことに参加者は特に驚いていました。予定外ではありまし

たが、ライオンの飼育舎内へも入らせていただきました。おりの中では柵1枚向こうからライオンがこちらを見ているためか、最初は皆さんの動きが少しぎこちないように見えたのですが、普段は入れないおりの中で動物園のライオンになった気分を味わいました。

最後に保護者の方から、大変思い出になった教室でしたと言っていただいたことが印象に残った一日でした。
(北原克宣)



▲ライオンの気持ちでおりの散策

8月10日（日）午後2時から博物館会議室にて講演会を開催しました。講師は、明治大学教授小林三郎先生です。8月1日から今年も大室古墳群の史跡整備調査を行っています。調査現場から会場に直行していただきました。

◇古墳群の特徴と性格

約500基のうち、石だけで墳丘をつくる積石塚と土と石を混ぜて墳丘をつくる土石混合墳が半分以上あり、積石塚は低墳丘が特徴となります。

また分布状況では30～40基で1つのグループをなし、その中に積石塚古墳と土石混合墳があり、箱形石棺、竪穴式石室、横穴式石室、合掌形石室など多種類の古墳形態があるのも特徴です。それぞれのグループにそれぞれの種類の違うものが混在して各グループが出来上がっていることがよくよくつかめてきたのです。

また、合掌形石室で積石塚の古墳が各グループの中に2～3基入っており、合掌形石室からグループの古墳築造が始まることもわかってきました。古墳群はこうしたグループの構造体になっているようです。日本列島におけるほかの群集墳のあり方はそれほど複雑ではありませんが、大室の場合はその構造が大変に複雑です。何種類もの古墳がグループの中に入っており、それがいくつもあり、最終結果として全体で約500基あるわけです。

◇大室古墳群の開始年代

古墳出土の土器では、土師器だけのもの、須恵器と土師器を伴うものという差があり、これは年代的な差であると認識しております。西暦450年位がこれらの画期となり、それ以前とそれ以後とに分かれるととらえています。168号墳はその画期となる5世紀中頃の積石塚と位置づけています。

日本列島に須恵器の技術が導入される時期、朝

鮮半島から馬具が渡ってくる時期、武器や武具が多量につくられるようになる時期、武器や武具の種類が増える時期、こうした時期からいくばくもない時期の5世紀代中頃に大室古墳群の築造が始まります。全体にかなり広い範囲のいくつかの集団が墓づくりを始めています。この集団が血縁集団だったのか、地縁集団だったのか、同業者集団だったのかはわかりませんが、いずれにしてもつながりを有していたものと思われます。大室にはだれでもが埋葬されたのではなく、各集団のリーダークラスの人が埋葬されたのではないかと考えています。広範囲の地域の人々が、大室の地を埋葬の地として定めたのではないかと思います。

◇古墳築造の時期的な区分

ムジナゴロ単位支群のように、狭い範囲に密集してつくられるのが大室の代表的な姿ではないかと思っています。244号墳のように1基が独立してつくられるようになるのは後半の時期になってからです。土石混合墳で横穴式石室が主流をなす時期以後のことです。それ以前は同じ地域に色々な種類の埋葬構造のものがつくられ続けます。こうした大きな2つの時期に区分して考えた方がいいと思っています。

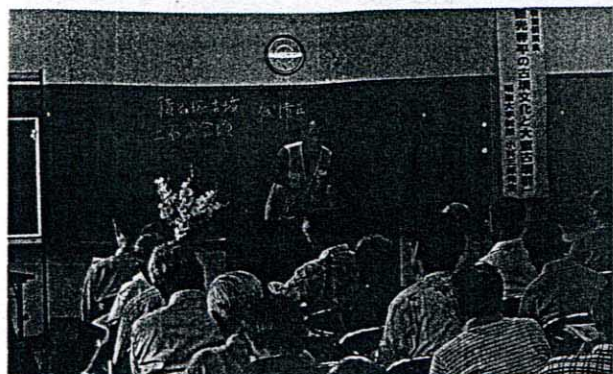
◇大室古墳群の系譜

これまでに多くの方が大室古墳群の合掌形石室は朝鮮半島の影響、しかも百済の影響であると言っています。しかし、百済に行っても大室のような合掌形石室は見られません。また百済には積石塚はほとんどありません。従って、百済に比定するのはむずかしいと考えます。現象的には低墳丘、積石塚、箱形石棺の例は北朝鮮の地域、昔の高句麗の領域に見られ、数は多いようです。

大室の積石塚、合掌形石室、箱形石棺の系譜については百済説ではなく、高句麗説を出そうかと考えているところです。

◇さらに調査継続を！

ほとんどが盗掘されている状況ですが、丁寧に調査をすれば何らかの痕跡はつかめます。調査にはまだ100年位はゆうに続くと思っています。調査した材料を整理して、後輩にきちっと伝えていきたいと思っています。（山口 明）

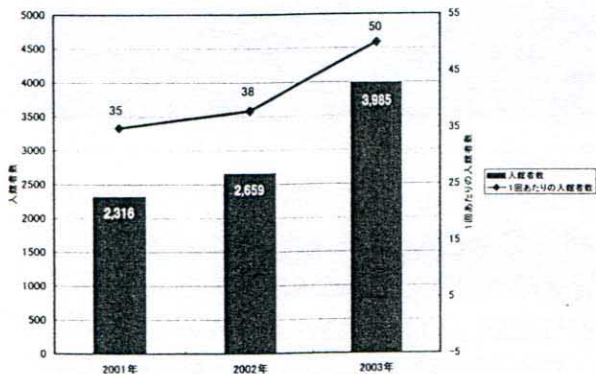


2003年 火星大接近の夏

◇プラネタリウムの火星番組

2003年夏は火星が大接近するため、当館プラネタリウムでも火星をテーマとした番組「ようこそ夢の火星ツアーへ」を制作し、投影しています。今年は火星が近日点付近での最接近となり、接近距離が5,576万kmになりました。過去において火星が今年よりも近くなったのは約6万年前という計算結果が出され、最接近にあわせてマスコミの報道も盛んになりました。ただ、32年前の1971年にも5,620万kmまで接近し、今回とそれほど遜色のない接近をしています。

火星に関心を示すことで、多くの市民が星空や宇宙に目を向ける機会が増えてきているのはたいへん喜ばしいことです。

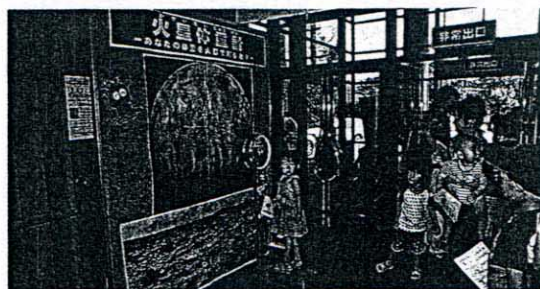


▲8月のプラネタリウム入館者数 (過去3年間)

8月の総入館者数は昨年の5割増しと近年見られない増加になり、プラネタリウムの全ての投影に火星大接近が影響を与えている印象を受けます。それを最もよく示したのが、プラネタリウム投影の一つ「星空の散歩道」です。月に1回行っている解説のみの投影で、8月31日に「火星大接近中」というテーマで行い、星空の散歩道始まって以来の入館者数となりました。最大限補助椅子を入れましたが、それでも20人以上のお客さんに、やむを得ずお断りせざるを得ませんでした。

◇火星大接近に関する報道と誤解

火星接近に向けてテレビや新聞等での報道が増加し、そのピークを迎えたのは最接近の8月27日でした。当館にも朝から報道関係や一般市民からの問い合わせの電話が相次ぎ、対応に忙しい1日になりました。その中には「8月27日しか火星が見えない」とか「火星は肉眼では見えない」



▲火星へ行くと体重が1/3近くに！
子どもに人気の「火星体重計」

などの火星に関する誤解が非常に多くあり、報道の仕方の責任も多々ある現象と考えられます。8月27日に見なければいけないというような内容が多いからです。

ある民放テレビキー局の8月27日朝の全国放送では、「次の大接近は284年後です」という大きな字幕付きで報道されましたが、これは明らかに間違いで視聴者を惑わすものです。その一方で、ほとんどのマスメディアで報道がなくなった28日以後、ある地元紙が「火星はこれからもしばらくはよく見えます」というフォロー記事があったことは救いでした。

◇火星(星)が見えない夏休み

火星接近が8月に起こり、夏休みとも重なったため大人だけでなく子供たちの関心も高まったようです。自由研究のテーマに火星や星を取り上げた人も多く、当館へも相談にきました。しかし、平年でも夜の天気が悪い夏の時期、今年はさらに悪く、肝心の火星が見えない日々が続いています。火星を見る観望会も8月に3回実施しましたが、いずれも雨または曇で見えませんでした。9月も4回実施予定ですが、晴天が待たれます。

(大蔵 満)



▲火星を見る会 (浅川公民館)
火星が見えないので、室内で学習会

提供：浅川公民館

大俣の水神祭り(中野市指定文化財)

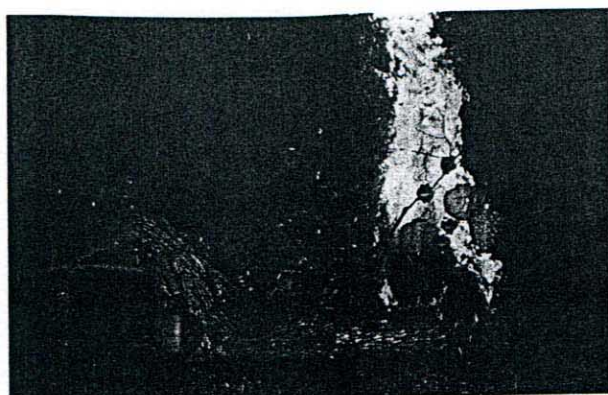
中野市大俣地区では、毎年お盆の8月16日(以前は17日)に、水神祭りが行われています。

祭りは朝から祭り保存会の人たちが村の広場に集り、区内を巡幸する竜をかたどった竜神船作りなど準備が進められます。竜神船は荷車に山からとってきた雑木を芯に据えて、そこに麦ワラやワラ、杉葉などを使って作られます。

夕方各家から持ち寄られた提灯を竜神船に飾りつけ、保存会役員の持つ5つの提灯を先頭に、田楽燈籠、竜神船が保存会のお囃子にあわせ区内を巡り、途中3力所の辻で獅子舞が奉納されます。その後かつての大俣の渡しに続く村境に移動し、元治2年(1865)に建てられた水難供養塔の前でケントウ(お囃子)が奉納されます。それが済むと千曲川河原に竜神船を運び燃やしました。かつては裸で千曲川までかつぎ込み流したということです。燃やし終わると高井大富神社に移動し、水神様の前でケントウが奉納され、社殿で獅子舞を奉納して祭りは終了します。

大俣の地区はたび重なる水害と旱魃に悩まされてきました。これに対し、昭和62年(1987)には地区を囲む総延長1240mの堤防を完成させ、現役の輪中の集落となりました。

大俣の水神祭りはお盆の精霊送りに、水死者や川流れの無縁仏の供養と、雨乞い、水難防止の願いが重なった祭りとされ、かつては立ヶ花、牛出、替佐など川べりの村々で同様の祭りが行われていたといえます。川沿いの人々の水に対する怖れと、水害除けの強い願いが巨大な竜神作りへとつながったのでしょう。(降幡浩樹)



▲千曲川の河原で燃やされる竜神船

松代町東荒町のお数珠回し

お数珠回しは本来百万遍念仏と呼ばれ、南無阿彌陀仏を百万回唱えることで、大いなる功德を得られるとする考えに基づいて、1080個の数珠がつながった大きな輪を一周させると1080回、これを千回続けると百万遍の念仏を唱えたことになります。お数珠回しに多くの人々が加わることで、仏の功德も広く行き渡ると考えられました。お数珠回しはまた、先祖供養や死後の極楽往生だけでなく、災害や病虫害を防ぐ威力を持った呪いとしての意味もあります。

毎年8月17日に松代町東荒町で行われるお数珠回しも疫病退散を願って始められたと伝えられ、集落の中心に祀られている秋葉さんの広場で行われます。しかし今年は大雨のため、公民館で行われました。行事がいつ頃始まったかは不明ですが、当日配るお札の版本には安政2年(1855)と記されているそうです。

午後6時前に役の人たちが集まり、準備を行い、6時半に鉦を打ち鳴らし数珠を回し始めると、鉦の音をききつけた集落の人たちがやってきます。お参りに来た人はお賽銭をあげ数珠回しの輪に入り、何回か数珠を回した後、お札をもらって帰ります。百万遍のお札は、線香の煙にかざして念仏の呪力を加えてから渡されます。お参りを終えた人が帰ると、新たにお参りに人が来るという具合で、入れ替わり立ち代り常に10数人の人数を保ちながら、途切れることなく数珠が回され午後8時に当番が百万遍の木札を掲げると百万遍達成ということになり、お数珠回しは終了しました。野外であれば気軽に参加できるお数珠回しも、屋内だと敷居が高くなるのでしょうか、今年は例年に比べお参りに来る人は少なかったようです。

(細井雄次郎)



集まれ！不思議探検隊

◇いきさつ

博物館では今年の春に「あの世・妖怪—信州異界万華鏡—」展を開催しました。タイトルからわかるように、この展示は全国の妖怪や地獄・極楽の資料を一堂に会したものでしたが、もう一つのテーマとして、できるだけ多くの信州に伝わる妖怪談・奇談、不思議な話を紹介することを目的としていました。しかし広い信州をわずかの職員でカバーすることは物理的に不可能でした。そこで、できれば市民の皆さんと一緒に調べることができないものか、そうすればより多くの話が集められるのではないかと考え、信州化け物講座という講座を始めました。講座には妖怪に興味のある方が集まり、講義や見学会に熱心に参加され、最終的には展示が開催された時にボランティアで説明やその他の仕事をお手伝いしていただくことになりました。しかし、残念ながら展示の準備に忙殺されたことと職員の力不足で、一緒に調査というところまでには至りませんでした。

そこで展示会が始まり、展示の仕事も一段落ついたのちに、それまでのボランティアの方や展示を通じて知り合った妖怪好きの方々と一緒に信州の不思議な話を調べるべく結成したのが、不思議探検隊です。



▲ 御嶽行者さん(左側)の話を聞く参加者

◇探検隊の活動

不思議探検隊では、信州に残る不思議な話の現場に行ってその痕跡を探ることを主な目的として、現在月に1回実施しています。5月から始まり、これまで4回行いました。第1回目は市内・須坂方面へ行き、鬼の頭蓋骨を探したり、妖怪がよく出た場所の見学。2回目は中条村で丑の刻参りが

行われたという現場へ行き五寸釘の探索などを行い、3回目は佐久方面、鬼の塚の見学や、御嶽行者さんに話を聞いたりしました。4回目は飯山・秋山郷へ赴き、狸大明神の石碑の見学や、河童の妙薬を作っていたお宅に伺って妙薬の作り方を教わったりしました。このように、探検隊では通常の見学会に比べ、参加者の方々が調べたり、探したり、話を聞いたりする機会が多いのが特徴です。

当面は職員が事前に調べた場所に参加者の皆さんを連れて行くという形で進めていますが、いずれは皆さんが事前に調べた場所に沿って訪ねて歩くという形にしたいと考えています。

◇活動の目標

これまで4回実施してきた探検隊ですが、隊の目標としては、江戸時代に流行した怪談百物語にちなんで信州版百物語を作りたいと考えています。そのためには必ずしも妖怪やお化けにこだわらず、不思議探検隊の名前通り、神仏の不思議な霊験譚（しんぶんとん）や不思議だなと思われる現象を広く取り上げ、百話の事例を積み上げていきたいと思います。

◇最後に

江戸時代に行われた百物語では、百話を話し終えると恐ろしきものが出現すると言われていました。探検隊でも百話成就のあかつきには、それまで集めた不思議な話をまとめたガイドマップを作ればと考えています。そのためにはより多くの方々に参加していただき、一緒に活動していくことが必要となってきます。不思議なこと、妖怪、怖いものに興味のある方で探検隊の活動に少しでも興味をもたれた方は博物館までご連絡ください。不思議探検隊は随時隊員を募集しています。

(細井雄次郎)



▲「千曲之真砂」の著者 瀬下敬忠郎を見学する

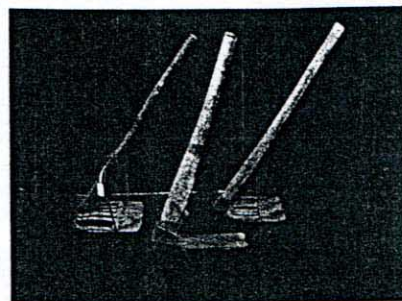
右下の写真を見てください。一見すると柄の短い鍬とジョレンという、ごく普通の農具ですが、実はこれらの道具は、葬儀の時に亡くなった人を埋葬するための穴を掘る道具として専用に使われたものです。かつて、亡くなった人の遺体は土葬で葬られていました。その際に重要な役割を果たしたのが、棺を墓場まで運ぶ棺担ぎと、棺を墓地に埋めるための穴を掘る穴掘りでした。しかしこれらの役は死の穢れが強いとされ、亡くなった人の遺族や近親者はつとめるものではないと考えられていたので、できるだけ亡くなった人と血縁関係の薄い人たちが行うのが一般的でした。

市内ではこの役を庚申講仲間がつとめる場合が多く見られました。そのため多くの庚申講では意図的に血縁関係のない家同士で講を組み、葬儀の際に支障をきたさないようにしていました。

ところが、葬法が火葬に変わり、葬儀社の関与などによって、庚申講が果たしてきた棺担ぎ・穴掘りの作業がなくなると、講の活動も休止あるいは停滞するようになりました。かつては60日に1回庚申の日には行われていた講の集まりを年に1

回としたところも少なくありません。当然、土葬に使われていた穴掘り道具や棺を担いだ蓮台もほとんど処分されました。

そのなかで、篠ノ井岡田本組の庚申講では2002年まで、講の掛軸などと一緒に、穴掘り道具も当番渡しの品として伝えられてきました。実際には、本組の庚申講でもこの道具を使ったのは戦前までで、以後は火葬となり使うことはありませんでしたが、葬儀という人生の中で最も厳粛な場面で使う道具ということもあって、簡単に処分できず、今に残されたのでしょう。現在市内にある庚申講のなかでもこのような道具を残すところは見られず、当時の庚申講の社会的役割を伝える貴重な資料といえます。(細井雄次郎)



9月23日

博物館まつり開催

◇当日は入館無料です！

博物館開館22周年記念の博物館まつりを9月23日に開催します。当日は博物館の常設展示室、プラネタリウム、自然史館が入館無料となります。

このおまつりは博物館に親しんでいただくために、博物館と友の会との共催で毎年開催しています。昨年までは3年続いて2連休で2日間の開催でしたが、今年は久しぶりに1日開催となります。

◇テーマ「町づくりを考えよう」

今年は、いつもとちょっと変わり、特別展示室では、「町づくりを考えよう」をテーマにミニ展示を準備しています。信州大学工学部山口研究室制作の畳10畳分もある大きな門前町並模型を展示します。この模型は白一色で制作されており、町並を空から鳥の目で見えてイメージをふくらませるためにつくられたものです。この模型からいろいろなメッセージを受け取ってください。

また、長野工業高等専門学校浅野研究室による「検証！中央通りの誕生と都市デザイン」と題し

た調査研究のパネル展示も行います。さらに模型や調査研究成果のパネルと共に、具体的に町づくりイメージ図を制作している竹村紀久子さんによる作品も展示します。

博物館では、長野の町の古い地図、絵図、写真や絵葉書などを展示する予定です。

こうしたミニ展示を通して、私たちが暮らす長野の町について改めて思いをめぐらしていただきたいと思います。

◇楽しい企画でんこ盛り

そのほか、クイズラリー、蓄音機コンサート、子どもたちの縄文土器づくり作品展、友の会同好会の風景写真作品展、天文写真展、縄文土器作品展示即売、街で見かけたへんな文字写真展、シャボン玉、輪投げゲーム、葉脈しおりづくりなど楽しい企画を用意しています。

◇移動動物園の開催

博物館前庭では茶臼山動物園からかわいい動物たちがやってきます。移動動物園で動物たちと触れあうのはいかがですか。(山口 明)